I Kings 17:2-22, 18:1-19

神さまがケリテとツァレファテでエリヤを養われる

（Ⅰ列王記17：2－3）「それから、彼に次のような【主】のことばがあった。『ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。』」

神さまはエリヤに、できるだけ遠くへ行って、いなかに身を隠すように命じておられます。そこで彼は荒野に出て行って、小さな川のほとりに来ました。

（Ⅰ列王記17：4）「『そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは烏に、そこであなたを養うように命じた。』」

神さまは荒野で、ふたつの方法を用いてエリヤを養われました。ひとつは小川で、これは自然の手段です。彼は水を呑まなければなりませんでした。もうひとつは超自然の手段です。烏が来て彼を養うというのです。エリヤはしばらくそこにいましたが、小川がかれ始めました。

（Ⅰ列王記17：7）「 しかし、しばらくすると、その川がかれた。その地方に雨が降らなかったからである。」

エリヤは荒野にいて、毎朝小川に行きます。そして水位が毎日少しずつ下がっていることに気づいています。くいを水の中に打っておきさえすれば、毎日水位がどのくらい下がったかが分かりました。ですから、自分が飢え死にするか、渇きで死ぬかまであと何日あるか、計算することができました。数学的な測定法があれば、常識のある人なら誰でも、いつか終わりが来ることは分かります。

これは統計の罪です。今日、しばしば教会の状況は、統計ではかられます。もしも、ある教会の集会へ行って、献金も良く集まり、新しいメンバーが受け入れられ、出席者が増えているなら、その教会はすごく成功している、と考えられます。でもそれはまったく本当の姿ではないかもしれないのです。

ひとりの説教者が、教会の総会で立ち上がって、次のように言ったという話を聞いたことがあります。
「会計係を呼んで私たちの教会の現状が分かるように、報告してもらいましょう。」
メンバーのひとりが立っていいました。
「先生。現状って、どういう意味ですか？」
説教者は答えました。
「『現状』というのは、私たちがどれだけ困った状態にいるか、ということです。」
面白いことには、統計は健全に見えるかもしれませんが、多くの教会やほかの組織の本当の現状は、彼らがどれだけ困った状態にいるかを明らかにするのです。

さて、エリヤは自分がいつ死ぬかを、かなり厳密に計算することもできたでしょう。数学的には、できたのです。でも、ご存知のように、数学的な冷たい数字は、そこにある霊的な火を考慮に入れません。教会の状況を、銀行の明細用紙に書き込むことはできません。コンピューターではかることもできません。リバイバルさえも、数字で決定するわけではないのです。エリヤがだんだんに細くなっていく小川を見たとき、彼は霊的なレッスンを学びました。彼の人生は、涸れた小川でした。彼はただ、生ける水が流れる“可能性のある”小川であり、水路である以外の何ものでもありませんでした。主イエス・キリストは言われました。

（ヨハネ4：13－14）「・・・『この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。』」

ときどき私たちは「私を祝福としてください（Make Me A Blessing）」という歌を歌いますが、半分の人たちはことばの意味を知らないと思います。（訳注：日本語には訳されていないようです。以下、歌詞を載せておきます。）

Out in the highways and byways of life,	人生のいたるところ、
many are weary and sad;	人々は疲れ、悲しい。
Carry the sunshine where darkness is rife,	暗闇が広がる中に、太陽の光を運び、
making the sorrowing glad.	悲しんでいるものを喜ばせよ。

Refrain	（くりかえし）
Make me a blessing, make me a blessing,	私を祝福としてください。
Out of my life May Jesus shine;	私の人生から、イエスさまが輝きいでてくださるように。
Make me a blessing, O Savior, I pray,	私を祝福としてくださるように、私は祈ります。
Make me a blessing to someone today.	今日、誰かのために、私を祝福としてください。

この歌は、あなたが空っぽの小川で、あなたにはいのちの水はないのだということを意味しています。いのちの水としての神さまのみことばがあなたを通して流れるときにだけ、あなたは祝福の水路となることができるのです。エリヤはそのことを学ばなければなりませんでした。

（Ⅰコリント1：27）「しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」

神さまはエリヤにこう言っておられたのです。
「お前は、大きく、強く、頑健な人物ではないのだよ。お前は、この干上がった小川以上に強くも優れてもいない。お前を通していのちの水が流れるまでは、お前には何の力もないのだよ。」
ハドソン・テイラー（Hudson Taylor 1832-1905：中国へのイギリス人宣教師。中国内陸宣教会（the China Inland Mission）の創設者。wholesomewords.org より）は、自分の宣教会で若い宣教師たちを奉仕のために準備させるときに、次のように言ったと言われています。
「ここに出て来たとき、あなたがたは“無”であることを覚えておきなさい。神さまがあなたがたを通しておできになること、してくださることだけに価値があるのです。」
ひとりの若い宣教師が答えました。
「ボクがただ無であると信じるのは難しいんですが。」
ハドソン・テイラーは彼に言いました。
「信仰をもって信じなさい。本当のことだから。キミは無なんだよ。」
神さまのみことばが私たちを通して流れるのでない限り、あなたも私もただの干上がった小川なのです。

そしてそのあと、神さまはエリヤを別の場所へ行かせられました。
（Ⅰ列王記17：8－12）「すると、彼に次のような【主】のことばがあった。『さあ、シドンのツァレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしは、そこのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている。』彼はツァレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、たきぎを拾い集めているひとりのやもめがいた。そこで、彼は彼女に声をかけて言った。『水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。』彼女が取りに行こうとすると、彼は彼女を呼んで言った。『一口のパンも持って来てください。』彼女は答えた。『あなたの神、【主】は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしているのです。』」
やもめが自分の話をしたあと、エリヤは彼女に、家に入ってパン菓子を作るように命じます。彼はやもめに、彼女は死ぬことはないと保証します。

（Ⅰ列王記17：13－14）「エリヤは彼女に言った。『恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。イスラエルの神、【主】が、こう仰せられるからです。「【主】が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくならない。」』」
ご存知のように、エリヤとそのやもめは、毎日その空っぽの粉のかめに頭を突っ込んで、頌栄を歌いました。そして神さまは彼らを空っぽの粉のかめを通して養ってくださいました。そのかめは、カナダの草原かアイオワのトウモロコシ畑のように肥沃でした。ここに、もうひとつエリヤが学ぶべきレッスンがあります。
これは、あなたや私も学ぶ必要のあるレッスンです。あなたは空っぽの粉のかめ以外の何ものでもありません。今日、あまりにも聖別ということについて耳にします。私たちは「自分の能力を主にささげる」べきだ

というのです。あなたも私も、神さまにおささげできるものなど、何ひとつ持ち合わせてはいません。ガリラヤのカナで婚礼がありました。その婚礼でもっとも重要だったものは何でしょう？花嫁のドレスでしょうか？とんでもない！重要だったのは、そこに空っぽの水がめがあったことです。主はそれに水を満たすように命じられ、ゲストにおいしいワインを出すことができました。それは婚礼の席には重要なことでした。私たちは、空っぽの粉のかめ、空っぽの水がめです。いのちの水といのちのパンが私たちのうちに入れられるまで、私たちは無なのです。そして私たちがこのことを認識しないので、今日の多くの教会で、私たちは霊的なフロア・ショーをやっています。それらは、宗教的なナイト・クラブになってしまいました。そしてそこには、カリフォルニア州パサデナのローズ・ボウル・ゲームと同じほどの霊的ないのちしかないのです。（訳注：ローズ・ボウルはアメリカン・フットボールの祭典でにぎやかなお祭りです。そこにはまったく霊的ないのちがない、と言いたいようです。）ほとんどの教会の集まりよりも、教会外での活動のほうが、もっと熱心でより多くの民衆を集めています。事実、私に言わせれば、多くの教会の集会は、とてもみすぼらしくばかげていますね。私たちは、自分たちが空っぽの粉のかめであることを思い出す必要があります。

やもめの息子が、エリヤによって生き返らされる

（Ⅰ列王記17：17）「これらのことがあって後、この家の主婦の息子が病気になった。その子の病気は非常に重くなり、ついに息を引き取った。」

やもめの息子が死にました。エリヤは何をしたのでしょう？

（Ⅰ列王記17：19－22）「彼は彼女に、『あなたの息子を私によこしなさい』と言って、その子を彼女のふところから受け取り、彼が泊まっていた屋上の部屋にかかえて上がり、その子を自分の寝台の上に横たえた。彼は【主】に祈って言った。『私の神、【主】よ。私を世話してくれたこのやもめにさえもわざわいを下して、彼女の息子を死なせるのですか。』そして、彼は三度、その子の上に身を伏せて、【主】に祈って言った。『私の神、【主】よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに返してください。』【主】はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。」

エリヤは、この少年のからだの上に、三度身を伏せました。これは、偉大なよみがえりの原則です。いのちとの接触が含まれています。今日、キリスト教は、イエス・キリストと接触する必要があります。イエス・キリストと接触していないとき、教会はドードー鳥（訳注：絶滅したハト科の鳥）と同じように死んでいます。これは聖書の中の偉大な奇蹟のひとつであることを認識する必要があります。

「子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。」

あなたも私も死んでいるのです。失われた罪人です。咎と罪の中に死んでいるのです。もし私たちがキリストを信じたなら、私たちはキリストとともに1900年（2000年）前に十字架につけられた、ということができます。主が死なれ、私たちも主とともに死んだのです。主はよみがえられ、私たちも主とともによみがえらされました。私たちは今日、生けるキリストにつなぎ合わされています。もし私たちが主につながっていないのなら、私たちは無です。使徒パウロは、次のように表現しました。

（ガラテヤ2：20）「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

エリヤは、自分が干上がった小川、空っぽの粉のかめ、死んだからだであることを学ばなければなりませんでした。エリヤがこのことを認識したとき、神さまは彼を用いることがおできになりました。マルティン・ルターは、神さまは無から創造される、と言いました。人は、自分が無であることを認識しない限り、神さまはその人を使って何かをされることはできません。今日の私たちの多くの問題はそれです。私たちは強すぎ、能力がありすぎるので、神さまは私たちを用いることがおできにならないのです。

18章

テーマ:エリヤ対バアルの預言者たち。

この箇所は聖書の中でももっとも壮観な章のひとつです。エリヤは、バアルの預言者たちに本当の神さまは誰かという挑戦をします。450人すべてのバアルの預言者たちは、このひとりの人エリヤと対等に釣り合っています。エリヤは偉大な人物です！

エリヤとオバデヤ

（I 列王記18:1－2）「それから、かなりたって、三年目に、次のような【主】のことばがエリヤにあった。『アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。』そこで、エリヤはアハブに会いに出かけた。そのころ、サマリヤではききんがひどかった。」

神さまはエリヤを使われる準備ができました。この人は今、大胆に出て行くことができます。彼は、自分は無であり、神さまがすべてであることを学んだのです。彼はアハブに会いに出て行きます。準備は整っていました。

（I 列王記18:3－6）「アハブは王宮をつかさどるオバデヤを呼び寄せた。──オバデヤは非常に【主】を恐れていた。イゼベルが【主】の預言者たちを殺したとき、オバデヤは百人の預言者を救い出し、五十人ずつほら穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養った── アハブはオバデヤに言った。『国のうちのすべての水の泉や、すべての川に行ってみよ。たぶん、馬と騾馬とを生かしておく草を見つけて、家畜を殺さないで済むかもしれない。』ふたりはこの国を二分して巡り歩くことにし、アハブはひとりで一つの道を行き、オバデヤはひとりでほかの道を行った。」

飢饉は今、極度に達していました。多くの植物が枯れてしまい、家畜はもはや草を食む場所を見つけることができませんでした。そこでアハブとオバデヤは牧草地になる場所がないか、探しに行きました。アハブはひとつの道を行き、オバデヤは別の道を行きました。さて、オバデヤはアハブの王宮をつかさどる人物でした。彼は神さまを恐れる人で、100人の神さまの預言者たちを、イゼベルの怒りからかくまいました。

（I 列王記18:7－8）「オバデヤがその道にいたところ、そこへ、エリヤが彼に会いに来た。彼にはそれがエリヤだとわかったので、ひれ伏して言った。『あなたは私の主人エリヤではありませんか。』エリヤは彼に答えた。『そうだ。行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言いなさい。』」

オバデヤが家畜の放牧地を探している間に、エリヤに会いました。エリヤは彼に、王に「エリヤがここにいる」と言いなさいと命じます。どれほどエリヤのような声が今日私たちに必要であることでしょう。私は、教会が地上を去ったあと、終わりの日にエリヤが帰ってくると信じています。この地上には、そのとき、エリヤのような力強い声が必要なのです。

（I 列王記18:9－13）「すると、オバデヤが言った。『私がどんな罪を犯したというので、あなたはこのしもべをアハブの手に渡し、私を殺そうとされるのですか。あなたの神、【主】は生きておられます。私の主人があなたを捜すために、人をやらなかった民や王国は一つもありません。彼らがあなたはいないと言うと、主人はその王国や民に、あなたが見つからないという誓いをさせるのです。今、あなたは「行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言え」と言われます。私があなたから離れて行っている間に、【主】の霊はあなたを私の知らない所に連れて行くでしょう。私はアハブに知らせに行きますが、彼があなたを見つけることができないなら、彼は私を殺すでしょう。しもべは子どものころから【主】を恐れています。あなたさまには、イゼベルが【主】の預言者たちを殺したとき、私のしたことが知らされていないのですか。私は【主】の預言者百人を五十人ずつほら穴に隠し、パンと水で彼らを養いました。』」

オバデヤは、エリヤのメッセージを届けることを望みません。なぜなら、アハブがエリヤに会う前に、エリヤが消えてしまうのではないかとおそれているからです。オバデヤは、自分のいのちを心配しています。そして彼は、エリヤが彼に頼んだことはしたくないことをとてもはっきりさせます。

（I 列王記18:14－16）「『今、あなたは「行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言え」と言われます。彼は私を殺すでしょう。』するとエリヤは言った。『私が仕えている万軍の【主】は生きておられます。必

ず私は、きょう、彼の前に出ましょう。』そこで、オバデヤは行ってアハブに会い、彼に告げたので、アハブはエリヤに会うためにやって来た。」
私たちはここまでで、三度もこのメッセージを読みます。「エリヤがここにいる。」エリヤが必ずアハブに会うと保証すると、オバデヤは王のところに行きます。そして、その人が何と言ったか、分かりますか？彼は「エリヤがここにいる」と言ったのです。そして、このメッセージはまたいつの日にか語られるメッセージなのです。

アハブへのエリヤの挑戦

（Ⅰ列王記18：17－18）「アハブがエリヤを見るや、アハブは彼に言った。『これはおまえか。イスラエルを煩わすもの。』エリヤは言った。『私はイスラエルを煩わしません。あなたとあなたの父の家こそそうです。現にあなたがたは【主】の命令を捨て、あなたはバアルのあとについています。』」
エリヤはアハブに言います。
「私はイスラエルを煩わしません。イスラエルを煩わす者は“あなた”です。」
エリヤのような説教は、誤解しようがありません。彼のメッセージは二枚舌ではありません。そのままのことを語っています。

先へ行く前に、言っておきたいことがあります。リベラル主義はいつでも教会の分裂を起こしたのはファンダメンタル（根本主義）だと非難します。でも、"本当に“分裂を起こしたのは、だれでしょう？教会は昔はとても根本主義的な信条を持っていました。誰が分岐を教会にもたらしたのでしょう？教会をその土台から迷わせたのは誰だったでしょう？リベラルでした。私は、自分の以前の教団から離れたと非難されて来ました。でも、私が離れたのではありません。教団が私から離れたのです。私は今も、最初と同じ信仰を持っています。不幸なことに、私の教団はこれら歴史的な信条から離れてしまいました。

教会の中のどんなトラブルでもファンダメンタル主義者のせいにするのが、いつでもリベラルの習慣でした。リベラルは一度も非難されないというわけです。

同じように、アハブはこの地のトラブルをエリヤのせいにします。彼はエリヤが騒動を起こすと言ってとがめます。神さまのみことばは、いつも騒動を起こします。面白いことに、明かりがつけられると、どぶねずみは必ず暗い隅に走って逃げます。

エリヤは、アハブに彼自身とバアルの預言者たちとのコンテストをするように挑戦します。

（Ⅰ列王記18：19）「『さあ、今、人をやって、カルメル山の私のところに、全イスラエルと、イゼベルの食卓につく四百五十人のバアルの預言者と、四百人のアシェラの預言者とを集めなさい。』」
コンテストは実際は、主とサタンの間のもの、生ける神さまへの礼拝と、バアル礼拝の間のものでした。外面的には、これは450人の預言者たちをともなった、エリヤに対抗したアハブとイゼベルの戦いでした。ところが、エリヤは、軍隊全体ほどの価値がありました。